

ブドウ台木‘テレキ5BB’を用いた醸造用ブドウ専用品種の簡易な苗木育成技術			
【要約】ブドウ台木品種‘テレキ5BB’を用いて、醸造用ブドウ専用品種の苗木を育成する場合、3月下旬の農閑期に、休眠枝同士を割り接ぎによって接ぎ挿しすることで、苗木として十分な穂木の新梢量を確保することができる。			
農業技術振興センター・花・果樹研究部・果樹係		【実施期間】	令和元年度～4年度
【部会】 農産	【分野】 競争力の強化	【予算区分】	県単
		【成果分類】	指導

【背景・ねらい】

近年、醸造用ブドウ栽培は、低コスト生産等が期待されることから生産者の栽培意向が高まっており、実需者からも県内産醸造用ブドウの増産が求められている。しかし、全国的な「日本ワイン」の人気の高まりに伴い、醸造用ブドウ専用品種の苗木の入手は困難になっているうえ、醸造用ブドウ栽培で一般的な垣根仕立ては、植栽間隔が狭いため、栽培面積当たりの苗の必要本数が多い。また、苗木業者が行う苗木育成技術の活用は、接ぎ木専用機械の使用や温床の確保など、一般の農業者には困難であり、直接ほ場で接ぎ挿しする場合、成功率は低く、枯死することがほとんどである。

そこで、醸造用ブドウの生産拡大と安定生産を図るため、苗木の入手が困難な場合において、簡易に取り組むことができるブドウ苗木育成技術を確立する。

【成果の内容・特徴】

- ① 3月下旬にブドウ台木品種‘テレキ5BB’と醸造用ブドウ専用品種の休眠枝同士を割り接ぎによって接ぎ挿しすることで、活着率および成苗率が比較的高く、苗木として十分な穂木の新梢量を確保できる（表）。
- ② 接ぎ挿しを行う前に、台木は2節残して切断し、上側に3cm程度の切り込みを入れ、下側の節の芽をせん定鋏等で切除する。穂木は1節残して、下側を長さ3cm程度で切断し、下端をくさび形に削る（図-a）。
- ③ 台木の切り込みに穂木を差し込み（割り接ぎ、図-b）接ぎ木部はパラフィンフィルムを用いて固定し、穂木の上部もパラフィンフィルムで覆い、乾燥を防止する。割り接ぎした後は、台木の下側の節が5cm角ロックウールキューブに埋まるように挿し木し（図-c）、毎日1回2分の頭上散水を行う。台木から発生する新梢はこまめに切除する。
- ④ 穂木が活着して2～3枚展葉し、ロックウールキューブの外側へ根が伸びてきた5月中下旬に（図-d）ポットへ定植する。

【成果の活用面・留意点】

- ① 醸造用ブドウ専用品種は、‘ビジュノワール’、‘ヤマソービニオン’、‘シャルドネ’、‘モンドブリエ’を用いた結果である。
- ② 台木と穂木の休眠枝を採取した後、ビニル等で密封のうえ冷蔵保存し、休眠枝が乾燥しないよう注意する。
- ③ 接ぎ挿し後、接ぎ木部においてカルスが形成され、パラフィンフィルムが破れる場合は、再度パラフィンフィルムで覆う。
- ④ 緑枝接ぎは、台木を3月上旬に5cm角ロックウールキューブに挿し木し、挿し木約100日後（6月中旬）に台木から伸長した新梢に穂木の緑枝を割り接ぎする方法で、‘マスカット・ベリーA’では活着率が高いが、醸造用ブドウ専用品種では活着率が低い。
- ⑤ 種苗法の改正により、令和4年4月1日から、果樹登録品種を自家増殖する場合は、育成者権者の許諾を必要とする場合がある。

[具体的データ]

表 接ぎ木の活着率および穂木の新梢生育

区 ^z	要因A (接ぎ木方法)	要因B (品種)	2021年				2022年			
			活着率 ^y (%)	穂木新梢長 ^x (cm)	穂木新梢径 ^w (mm)	成苗率 ^v (%)	活着率 (%)	穂木新梢長 (cm)	穂木新梢径 (mm)	成苗率 (%)
ビジュノワール・緑枝接ぎ区	緑枝接ぎ	ビジュノワール	15	55.1 b ^u	3.8 cd	10	—	—	—	—
ビジュノワール・休眠枝接ぎ区	休眠枝接ぎ		55	208.5 a	6.6 b	55	—	—	—	—
シャルドネ・緑枝接ぎ区	緑枝接ぎ	シャルドネ	35	119.1 b	5.3 bcd	35	—	—	—	—
シャルドネ・休眠枝接ぎ区	休眠枝接ぎ		75	240.2 a	7.8 a	75	—	—	—	—
マスカット・ベリーA・緑枝接ぎ区	緑枝接ぎ	マスカット・ベリーA	80	97.5 b	5.1 d	80	100	109.1 b	4.8 c	75
マスカット・ベリーA・休眠枝接ぎ区	休眠枝接ぎ		55	237.6 a	6.6 bc	55	90	253.2 a	6.0 bc	90
ヤマソービニオン・緑枝接ぎ区	緑枝接ぎ	ヤマソービニオン	—	—	—	—	40	76.0 b	4.4 c	35
ヤマソービニオン・休眠枝接ぎ区	休眠枝接ぎ		—	—	—	—	90	235.8 a	7.8 a	90
モンドブリエ・緑枝接ぎ区	緑枝接ぎ	モンドブリエ	—	—	—	—	60	141.5 b	4.9 c	60
モンドブリエ・休眠枝接ぎ区	休眠枝接ぎ		—	—	—	—	75	307.7 a	7.0 ab	75
分散分析 ^t	要因A	接ぎ木方法	—	**	*	—	—	**	n. s.	—
	要因B	品種	—	*	**	—	—	**	*	—
	交互作用	A×B	—	n. s.	n. s.	—	—	n. s.	*	—

z: 緑枝接ぎ区は、台木を3月上旬に挿し木してその約100日後に割り接ぎし、休眠枝接ぎ区は、3月下旬に割接ぎによる接ぎ挿しを実施。

y: 活着率は、供試数20本のうち、接ぎ木部にカルスが形成され穂木から2～3枚展葉が確認できた割合。

x: 穂木伸長量は、各区接ぎ木成功後の9月4日に測定。

w: 穂木新梢径は、接ぎ木位置から3～4節上の節間を9月4日に測定。

v: 落葉後に苗として使用できるか調査（接ぎ木位置から3～4節上の節間部の新梢径が3mm以下は苗として不適と判断）。

u: Tukeyの手法による多重比較検定において、異符号間に5%水準で有意差あり。

t: n. s. は有意差なし、**は1%水準、*は5%水準で有意差あり。

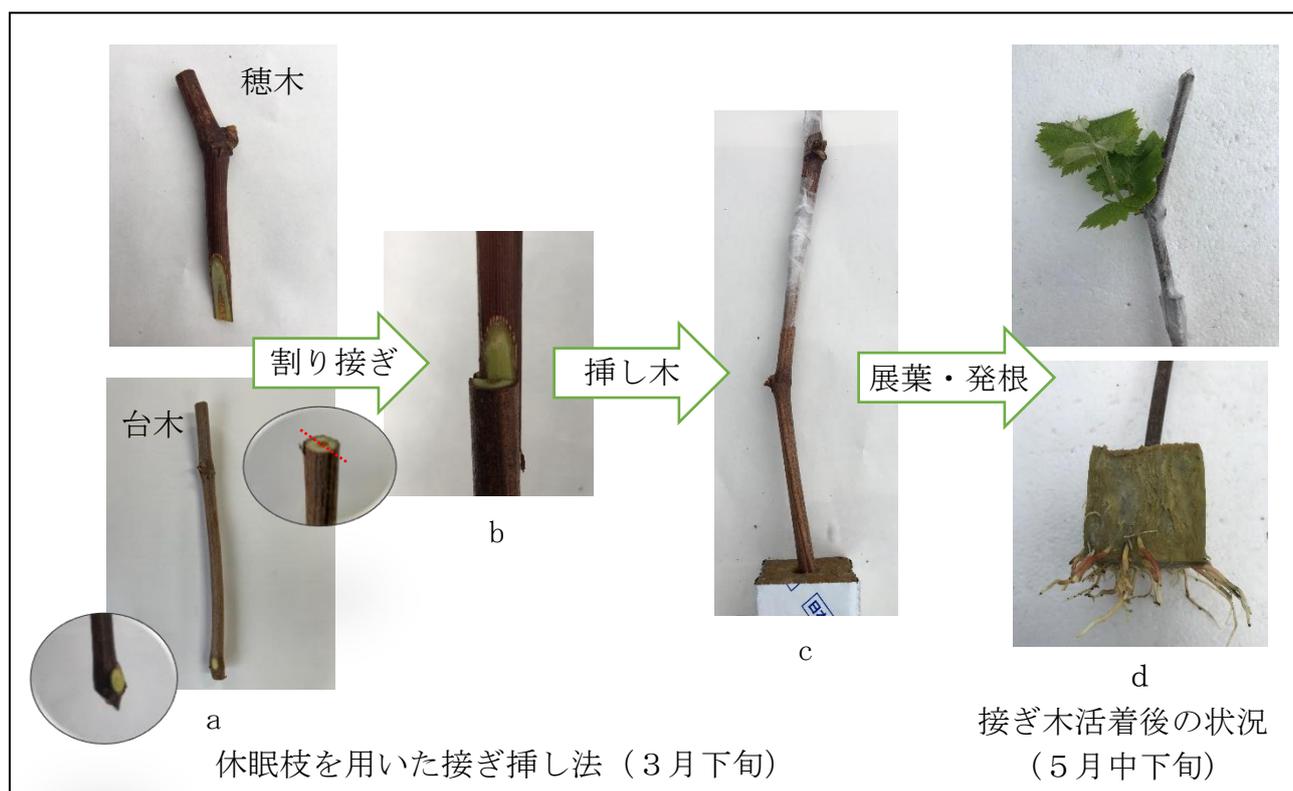


図 休眠枝を用いた割り接ぎによる接ぎ挿し法

[その他]

・研究課題名

大課題名：経済活動としての農業・水産業の競争力を高める研究

中課題名：需要への変化への対応と農地・農業技術等の実証

小課題名：新たな需要に対応した醸造用ブドウ栽培技術の開発

・研究担当者名：三溝 啓太 (R1～R4)

・その他特記事項：技術的要請課題：東近江農業農村振興事務所 (H29)